

---

# **天空の難破船 | 撮影編 -side Kaito-**

翠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天空の難破船—撮影編 - side Kaito -

### 【NZコード】

N0149M

### 【作者名】

翠

### 【あらすじ】

【快斗 蘭】「天空の難破船」の原作絵ポスター撮影風景の快斗サイド。

拍手おまけ話あり

白い手袋をはめた手が少女の白磁の肌に伸ばされ、その顎を優しくつまみ上に向かせる。お互いの瞳の中に他のものを映すのを拒むかのようだ、ずっと二人の視線は合わされたままだった。

そして、全身を神聖なる色 純白に身を包んだ怪盗紳士は、顔を心もち傾けるとそつと少女の唇に近づける。

顎にかかるその手が、少し震えていることに誰が気づいただろ？

あと少し……。

二人の唇が触れるか触れないかのところで無粋なドアの音が響き渡り、小さな少年が少女の名前を叫びながら飛び込んできた。興を削がれた怪盗紳士は軽くため息をついて少年を見やる。そして、口の端をくっと持ち上げ不適に微笑んだ。

「よっ。また会つたな、名探偵」

「…………キツイ」

「カツ-----ト-----！」

あたりの張り詰めた空気が一瞬にして緩む。止まっていた時が再び動き始めたかのように、スタッフがめいめいの仕事をするために忙しそうに動き回り始めた。

快斗は目を閉じて小さく息を吐き、思考を切り替えると、ゆっくりと理知的な瑠璃色の瞳をのぞかせながら顔を上げる。

「お疲れ様ー！ 続いてポスター撮影始めるから、黒羽君と毛利さんはそのままね。ああ、毛利さんは衣装チェンジ。だれか、連れて行つてあげて」

「大丈夫？ 蘭ちゃん」

腕の中の少女の異変に気づき、蘭を迎えてきたスタッフを手で軽く制すると、少しかがんで蘭の浅紫色の瞳をとらえた。

どうやら緊張と照れからか、のぼせたようになつているらしい。

顔だけでなく耳まで真っ赤になつており、小刻みに震えてわずかに快斗に身を預けている様子はなかなかそるものがあつたが、どうしたものかなと快斗は考えた。

「いつまで蘭姉ちゃんにくつついてるの？」

怒気を含んだ声に振り返ると、先ほど、演技とは思えない真剣さで彼女の名前を叫んだ小さな少年、江戸川コナンがいた。

さすがに、#芝居とはいえ、他の男の腕の中にいるのは見たくもねえってか？

快斗はコナンの不機嫌な理由が手にとるほどわかつた。だが、ライバルの『機嫌を取る趣味などは持ち合わせてはいない。

「おやおや、名探偵。お姫様が気になるのかな」

「離れるよ」

「年上のオーランに向かつてその言い方は感心しないなあ……なあ、ボウズ」

快斗は眉を上げ口の端を持ち上げると、コナンを撃発するかのように蘭の腰を引き寄せる。

見えない火花が二人の間に飛び散る中、甲高い声が割つて入った。

「ハイハイ。どいたどいた。蘭、大丈夫！？」

今回この撮影の sponsa - オンサー、鈴木次郎吉のいとこの娘となる鈴木園子である。園子は蘭に駆け寄ると快斗から引きはがし、熱を測つたり扇いだりしてかいがいしく世話をしていた。

「だ、大丈夫。ちょっと緊張しちゃつて……」

弱々しい声でほてつた頬に手をあてながら答えるごじゅうこ姿で、快斗の心臓はドクンと跳ねる。

「仲がいいんだな、園子さんと蘭ちゃんは」

人懐っこい、にこやかな笑顔で親しげに名前を呼ぶ快斗に、園子は眉をひそめて口を開く。

「ねえ、黒羽君。なんで、蘭は『蘭ちゃん』で、私は『園子さん』なワケ?」

「へ? 『つーん……なんとなく』

「なんとなく?」

腰に両手を当て半分座った田で快斗を睨めつける園子に、快斗は内心汗をかきながら、しかし笑顔は崩さずに答える。

「やはり、鈴木財閥の令嬢といつだけあって、園子さんは凛としたオーラを感じるんだよなあ。だから思わず『さん』ってつけちまう。まあ、内面からにじみ出る気品ついやつがそういうものかな」

「あら、やだ。やっぱりそうかしら」と満更でもない様子の園子に、うんうん。とうなずきながら、快斗はさり気なく蘭の頭を撫でて「あ、蘭ちゃんはとってもあつたかくてかわいいから『ちゃん』つてつけちまうんだぜ。また全然違つかんな」とフオローを入れる。それを見て園子は肩をすくめた。

「なんなの、この手の顔は蘭に甘くなるよう出来るワケ? 外見はキッド様にそっくりなのに中身はてんでお子様ね!」

「『Iのサの顔』といふと、オレに似てゐる……キッドが好んで化けているといつ『工藤新一』つてヤツのことかな。蘭ちゃんのタダの幼なじみの」

快斗が『タダ』のあたりを強調して意味ありげにコナンに視線をやる。するとコナンも負けじと意地の悪い微笑を返した。

「新一兄ちゃんに化けてるんじゃなくて、中森警部に近い『黒羽快斗』兄ちゃんに化けてるんじゃないの、キッドは。もしかして快斗兄ちゃんがキッドだつたりして、手品も得意みたいだし」

「ほーう。……面白い推理だな、ボウズ」

またしても険悪な空気になつたところへ「それはないな」と、低くよく通る声がした。

「中森警部ー！」

数人の刑事を伴つて、次郎吉と共に中森はスタジオに入ってきた。中森は苦々しそうにキッドの変装をしている快斗を見てから、コナンに視線を向ける。

「以前、Iの快斗君がいる田の前でキッドが盗んで行つたことがある。わしの娘に変装したこともあるし、どうやらわしに近い人間のフリをするのが好きなようだ。快斗君にそっくりな工藤新一の方かもしけんが。一度対決しているしな」

快斗が心底嫌そうに、「オレと同じ顔がいくつもあるなんて、いやなんだけど」とつぶやくと、中森は肩をすくめて「そんなこと、キッドと工藤新一に言つてくれ」と部下達の方へ歩いて行つた。入れ替わりに次郎吉がやってきて感心したようにキッドに扮した

快斗をみやつた。

「それにしても、本当にキッドに似どるの。」

「キッドが勝手にオレの顔を使つてるだけですよ」

まじまじと快斗を見ていた次郎吉は、ガハハと豪快に笑いながら快斗の両肩をバンバンと叩いた。

「IJのCMが流れたのを見た時の彼奴を見てみたいわ！！ ポスターも到る所に貼り出してやる。観客も大喜びだらう！」

快斗は次郎吉と一緒に笑いながら、内心ペロリと舌を出した。

そう、IJの次郎吉は、キッドに もう幾度田だろつか 挑戦状を叩きつけるため、趣向を凝らしてきた。今度は飛空船の中へ盗りに来いというのだが、その挑戦をキッドが受けざるをえないように、大々的に広告をうつ氣だ。キッドが好んで変装するといつも黒羽快斗 つまりオレをキッドに仕立てて、そしてキッドをいつも擊退しているという少年、江戸川コナンとの対決が待つているといつも演出で。

(こんな手の込んだ事しなくとも、挑戦されれば出向いてやるつゝの。『天空の貴婦人』は探していたビッグジュエルの一つだし、蘭ちゃんが持つつーんだから尚更、な)

快斗は思いもかけない形で、以前から気になっていた蘭と、自然な形で出会つことが出来た奇跡に感動していた。

(今回ばかりは、感謝してやるぜ。次郎吉さんよ)

「機嫌でコナンと園子に付き添われている蘭に近づくと、快斗は蘭に優しく声をかけた。

「あ、だいぶ顔色が良くなつたね。着替えて来れる? 次はもう一回さつきみたいなキスシーンの撮影だよね。蘭ちゃんがウェーディングドレス姿の」

「なつ!」

絶句しているコナンの方を、これまで挑発的な視線で見る。

(おもしれえ……)

快斗はコナンの素直な反応がおかしくて仕方がなかつた。

「あらヤダ。ホント、急がないと。蘭大丈夫?「行くわよ」と、園子に連れられて蘭は着替えに行つた。

ヘルヘラとニヤけた顔をしながら手を離つて蘭を見送る快斗を、射るような視線でコナンが見上げていた。

快斗の表情の変化を見逃すまいとするように、コナンはじつと快斗を見つめながら口を開いた。

「ねえ。快斗兄ちゃん

「あん?」

「……本当はキッズなんでしょう」

「ナンの訝るような視線に気がついていた快斗は、気づかないフ

りを決め込んでいたが、やつと口ナンに向かた。その顔はとても楽しそうだつた。

「違ひつーの。キッドがオレに似てるだけだ。上藤新一に似てるよつこ、な」

快斗は反応を試すよつこ新一の名前を出す。  
口ナンは一瞬眉間にシワを寄せると、皿を伏せ口の端を上げて微笑んだ。

「ふう……ん。やつなんだ。黒羽、快斗……ね」

「呼び捨てにすんな。ガキが」

「よーく、覚えておくよ。快斗兄ちゃん」

何もかも見透かしたような瞳で見上げた口ナンを見て、快斗は「オレは忘れてくれても、全く構わねーゼ」と肩をすくめた。  
「口ナンはブスッとした顔をして快斗を睨みつけた。

「それから……蘭姉ちゃんはダメだからね」

「なんで?」

「何でつて! 蘭姉ちゃんには……オ……新一兄ちゃんがいるから

……

「へえ……?」

快斗は皿を細めて口ナンに視線を向けた。

「で? 上藤新一は蘭ちゃんと口ナンしてるワケ? そして蘭ちゃんはそれに口をしているワケ?」

「い、いや……まだ……」

「そつか。まだなーんもないワケね。なーんも。……ならオレにも

チャンスあるよな

「えー?」

「オレも、彼女の」と、気に入ってるんでね。諦める気はねーぜ」

快斗はしゃがみこんで口ナンに視線を合わせると、にかつと笑つて口ナンの頭をぐしゃぐしゃと撫でた。

「……って、新一兄ちやんに会えたきな。ボ・ウ・ズ」

背後がザワつき出し、蘭が戻ったことがわかると、快斗は「おっと、花嫁のお出ましだぜ」と口ナンの額を軽くつついて立ち上がり、蘭の方へと歩いていった。

口ナンは呆然としながら快斗を見送り、さきゅうと手を握りしめた。

(あ、アイツ……せつてーキッドだろー)

(後書き)

某快蘭サイトマスター様にネタを頂ましたので妄想具現化。

拍手おまけ話あり

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0149m/>

天空の難破船 | 撮影編 -side Kaito-

2010年10月17日01時39分発行